

平成十一年一月二二日宣告 裁判所書記官 矢野
平成十一年(わ)第二三八号 傷害被告事件

判決

本籍 金沢市東力二丁目二八番地二
住居 金沢市北安江町四七九番地九
職業 建設作業員

廣 野 秀 樹

右の者に対する頭書被告事件について、当裁判所は、検察官
下平豪出席の上審理し、次のとおり判決する。

主 文

被告人を懲役一年八月に処する。

未決勾留日数中六〇日を右刑に算入する。

理 由

(罪となるべき事実)

被告人は、平成十一年八月八日午後九時五分ころ、金沢市富
樫一丁目一四五番地一所在のスーパーマーケット「ニュー三久
泉が丘店」駐車場において、安藤健次郎(当時六四歳)に対し、
その顔面を手けんで複数回殴打して転倒させたり、その前頭部
付近を足げにしたりする暴行を加え、よって、同人に通院加療
約一〇日間を要する頭部顔面打撲傷、口内裂傷、両肘擦過傷の
傷害を負わせたものである。

(証拠の標目)

かつこ内の符号甲、乙の付された数字は、後記累犯前科欄を含め、証拠等関係カードにおける検察官請求証拠番号を示す。

一 被告人の当公判廷における供述

一 被告人の検察官(乙8)及び司法警察員(乙3)に対する各供述調書

一 安藤健次郎の検察官に対する供述調書(甲15)

一 司法警察員作成の実況見分調書二通(甲5、7)

一 司法警察員作成の写真撮影報告書(甲3)

一 司法警察員作成の捜査報告書(医師吉田千尋作成の診断書添付のもの。甲2)

三頁

(累犯前科)

被告人は、平成四年八月三日金沢地方裁判所で傷害、準強姦の罪により懲役四年に処せられ、平成九年一月一七日右刑の執行を受け終わったものであつて、右事實は検察事務官作成の前科調書(乙10)によつてこれを認める。

(法令の適用)

被告人の判示所為は刑法二〇四条に該当するところ、所定刑中懲役刑を選択した上、前記の前科があるので同法五六条一項、五七条により再犯の加重をした刑期の範囲内で被告人を懲役一年八月に処し、同法二一条を適用して未決勾留日数中六〇日を右刑に算入し、訴訟費用は刑事訴訟法一八一条一項ただし書を

四頁

適用して被告人に負担させないこととする。

なお、被告人は、本件公訴提起が不当であるなどとして公訴棄却を求める旨主張するが、本件全資料に照らしてみても公訴提起をはじめとする検察官の事件処理に何ら違法、不当な点はないものと認められるので、右の主張は採用しない。

（量刑の理由）

本件は、被告人が、夜間の駐車場で六四歳の知人男性に殴るけるの暴行を加え、加療約一〇日間を要する傷害を負わせたという事案である。

右の犯行は、被告人が、前記のとおり累犯前科となる傷害、準強姦事件での服役後も、同事件の被害女性方に繰り返し電話

するなどして執ように接触を試み続けた挙げ句、ほとほと業を煮やした同女の父親から右の行動を非難され「犯罪者」などののしられるや、立腹して一方的な暴行に及んだというものであつて、犯情甚だ悪質というほかない。加えて、本件被害者やその妻の深刻な苦悩に根ざした処罰感情には当然のことながら極めて厳しいものがあること等の事情にも照らすと、被告人の刑事責任は相当に重いといわざるを得ない。

してみると、他方で、本件暴行態様が比較的単純で被害者の負傷程度も幸い軽微なものにとどまったこと、被告人が、捜査公判を通じ、今後は二度と被害者家族に自ら接触を図ることはしない旨述べて一定の反省の情を示していること等の被告人の

ために酌むべき事情も存することを十分考慮しても、被告人を
主文程度の懲役刑に処するのはやむを得ない。
よって、主文のとおり判決する。

(求刑 懲役二年)

(弁護人 (国選) 野田政仁)

平成一一年一二月二一日

金沢地方裁判所

裁判官

小川賢司

これは謄本である
平成 15年2.1月 日

金沢地方検察庁検察事務官

遠塚貴

